

表現と暗号

柴田晋平

2025年1月24日

1 リアルと表現(生きるためのバランス)

Podcast ポケットにポラリスの「リアルってなに」の中でちょっと触れた事：**リアルは input** である。その場で見たり聞いたり、、感じた事、つまり、インプットされたこと全てをリアルと呼んでいる。「リアルってなに」かを語る時、語った時、そこに出てくるものは**アウトプット**、別の言葉では「表現」。「リアル>表現」という不等式が成り立つので(表現したものはリアルの一部に過ぎないので)、「リアルってなに」を表現することはできない: このテーマには答はない。

理屈っぽく言ったけど、「美しい星空を観たとか、子供の学芸会に出たということ、伝えたい/表現したいと思っても無理だよね。やっぱりリアルが一番だよね」という話だ。

表現したいと思っても言葉で不十分、音が欲しいとか、映像とか、感触とかなかなか難しい。それでみんなが苦労するけど、工夫する楽しみがまた格別良い。良い曲を作るとか、絵を描くとか、ドラマを作るとか、みんな頑張って挑戦して、楽しんでいる。

「不完全と知りつつも頑張る**表現**は面白いよね!」というのもとてもよくわかる。「リアルよりすごい感動を与えられたら!!」と夢見て頑張る、人類の健気な姿!

人が受け取る「表現」について、最近面白い言葉に出会った。ドイツの実存主義の哲学者として有名なカール・ヤスパーズの著書を読んでいて「**暗号**」という言葉に出会った[1]。私は哲学の勉強はしたことはないし、ヤスパーズの本を読むのも40年ぶりということで、ヤスパーズの言う「暗号」の意味はよく理解できていない。例としてあげていたのは「神からの言葉」のようなものは「暗号」で、人はそれを解読しないとけ

ない立場にあるようだ。神の言葉は暗号というわけだ。星占いも似ているじゃない？星の動きを暗号とみなして、読もうとするところ。

一つの宗教ではたくさんの暗号があってそれを系統的に読み解いていつているが、「リアリティと表現」と似た関係になっていて、表現＝暗号は原理的に読みきれないものでリアリティには決して至れない。読み解きはたくさんの可能性があり不安定で、結局は解読内容は**自己責任**。

物理学とか天文学は暗号を相手にしている感じはしない。そこが科学の特徴のように思う。まだ解けていなことはあるけど暗号ではないと思う。

また、以前「失敗からどう立ち直ればいいのか」の会で話した洪水に悩んだ人間の対応を思い出してほしい。水の神様の飢えを抑えるために生贄をささげたり呪文を唱えたりする方向と土木工事をするなどの具体的対応をする方向があった。

前者は暗号に属するものでそれで洪水が防げると解釈されている(読み解かれている)。生贄を捧げるのは嫌だなと思った人は暗号を別に解釈して、別の儀式への変更を考えるかもしれない。暗号の理解は一定ではないから変更可能である。

一方、洪水が発生する前に、家族が乗れる船を準備しておいて家族の命を救うことができる。神に祈りを捧げる方式では解決しないことがここでは解決できている。こちらは物質的なものを科学的にアプローチして解決しようとしていて、暗号のような解釈のブレはない。つまり、神あるいは暗号の世界と科学の世界は区別がつく。

洪水で被害が出ないようにという思いは同じでも、災害から守るための心の表現、いわば、暗号部分と災害から守るための科学的なアクション部分との二つがあって、それぞれの違いをよく理解していなければならず、バランスを取って進まないといけない。

もう少し具体例で説明すると。災害現場に立つ被災者の気持ちを想像してみる。災害現場のリアリティの中で、そこから受け取った暗号を読み解く、そして結果、亡くなった人の分も頑張って生きていこうという思いが出てくる。また、同じ災害現場のリアリティの前で、同じようなことがおこらないようにこんどは新しい設計の建物で再建計画をつくろう、実行しようとするのが科学的なアクション部分になる。人間は両者を操って生きている。

参考文献

- [1] カール・ヤスパース, 1966, 「哲学の学校」, 松浪信三郎訳, 河出書房
新社